



文化財愛護
シンボルマーク

松江北東部遺跡 分布調査報告書(2)

1985年3月

松江市教育委員会

凡　　例

- 本書は、松江市教育委員会が、昭和59年度において、国庫及び、島根県補助金を得て実施した松江市福原地区の分布調査事業の概要報告書である。

- 分布調査事業の組織は下記のとおりである。

事業者　松江市　　松江市長　中村芳二郎

主体者　松江市教育委員会　教育長　内田　榮

事務局　松江市教育委員会社会教育課

総括　社会教育課長　野津久夫

担当者　文化係長　岡崎雄二郎

遺物整理作業員　長谷川　裕　吉岡　玄一　糸川　陽子

作業員　福田　哲夫　福田　富樹　福田　邦光　福田　醇

　　福田　豊　松田　正紀　福田　茂夫　種田　英

　　福田　勝義　福田　花子　福田　澄江　寺本千栄子

　　小谷　清子　藤井とし子　安達多津子

- 発掘調査の結果については、島根大学名誉教授山本清氏及び島根大学法文学部助教授渡部真幸氏から現地指導を得た。

- 本書の編集は、社会教育課の中尾秀信、岡崎雄二郎、錦織慶樹の3名が協議してまとめた。

目 次

1. 調査に至る経緯	1
2. 歴史的環境	1
3. 調査の概要	4
4. 出土遺物の概要	25
5. 小 結	26
(1) 調査箇所について	26
(2) 島根郡家との関連について	27

文化財愛護シンボルマークとは……

このマークは昭和41年5月26日に文化財保護委員会（現文化庁）が全国に公募し、決定した文化財愛護の運動を推進するためのシンボルマークです。

その意味するところは、左右にひろげた両手の掌が、日本建築の重要な要素である「柱」、「すなわち竿」と「檻」の組み合わせによって全体で軒を支える腕木の役をなす組物のイメージを表わし、これを三つ重ねることにより、文化財というみんなの遺産を過去・現在・未来にわたり永遠に伝承していくこうというものです。



文化財愛護
シンボルマーク

I 調査に至る経緯

松江市教育委員会では、松江市の北東地区のは場整備事業に先だって昭和59年度に持田地区の分布調査を行ったが、昭和60年度は坂本、福原地区の整備計画に伴い同地域で分布調査を実施して、遺跡の有無を確かめることになった。

福原地区のは場整備地域は、この地区的25.3haを対象とするものであるが、ここは持田地区の北東部に隣接した水田地帯で、集落跡や、鳥根郡家跡などが推定される場所として知られている。

当初の調査計画は、昭和60年度の工事予定区域一帯に幅2m、長さ10m、深さ最大1mのトレンチを10ヶ所設定し、遺構の有無を確認することとしていた。

ところが、福原地区においてトレンチを設定する予定であった地域のさらに南側の59年度工事区域内で、一部耕作土が除去された後の地面上に、多数のピットと溝状遺構が検出されたので、これを芝原遺跡となづけこの部分の工事を中止してもらい、は場整備の工事区域を南部と東部の低地水田一帯に振り替えてもらうこととし、その変更工事区域について、幅2m、長さ4mを基準としたトレンチを36ヶ所設定し遺構の範囲と概要を確認することに調査計画を変更した。

調査は、昭和59年12月3日から昭和60年2月6日までの内28日間を要して行った。

II 歴史的環境

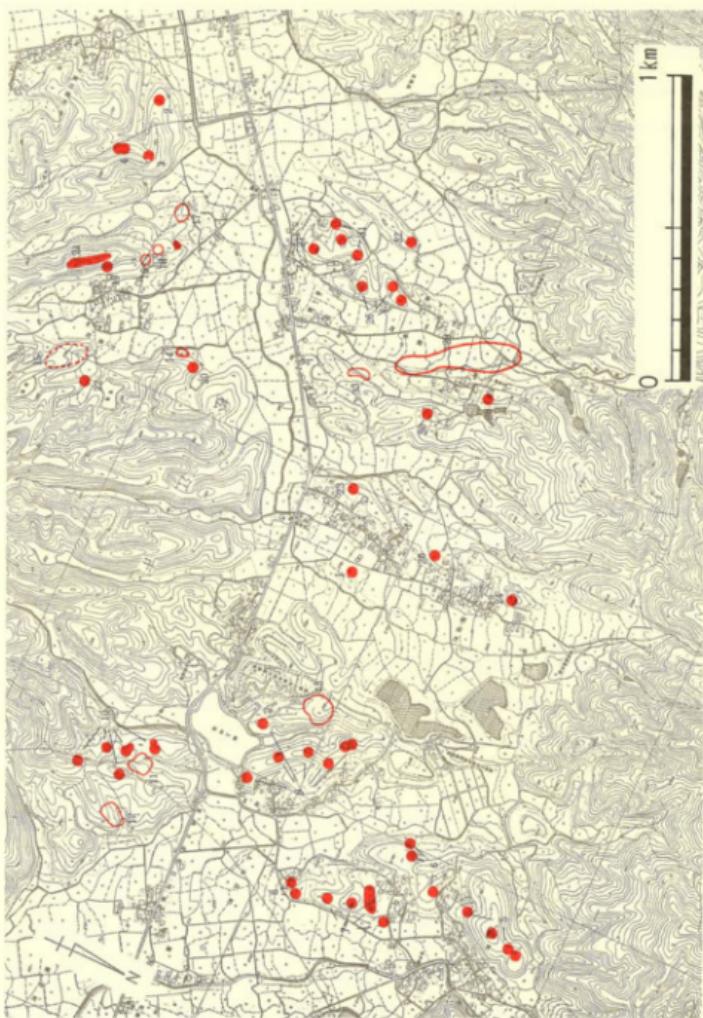
澄水山（風土記でいう毛志山（もし））の山すそから発した朝酌川は風土記では「水草川（みくさ）」といい、福原町地内で南に下りさらに大きく西へ蛇行して持田、川津地区を通って大橋川と合流するが、この河川の流域には縄文時代から歴史時代に至る数多くの遺跡が知られている。

分布調査の未だ行われていない地域も多くあり正確には把握出来ないが、本調査区域を含む2km四方の範囲だけでも、10カ所以上の遺物散布地と、50基以上の古墳が確認されている。

薄井原古墳は、全長50mを測る前方後方墳1基と、一辺約8mの方墳2基から成る古墳群である。前方後方墳については昭和36年に調査が行われており、後方部に二つの石室を行し、馬具、直刀、ガラス小玉などの多数の遺物が検出されている。古墳時代後期に築造

されたものと考えられている。

坂本中遺跡は、薄井原古墳群の北東に連なる低丘陵上にあり、多数の須恵器・土師器が散布している。おおよそ古墳時代後期から、奈良・平安時代に及ぶ集落遺跡と考えられている。



第1図 周辺の遺跡分布図

また、島根郡家については、規模、位置とも明確ではないが、旧島根県史で野津左馬之助氏が提唱しておられる所謂出雲風土記所載の「島根郡家(しまねこほりのや)」推定地の一つが本年度の調査地一帯にふくまれ、これに関する遺構の検出が期待された。

第1表 周辺の遺跡一覧

番号	名 称	所 在 地	内 容	備 考
1	芝 原 遺 跡	福原町芝原	柱穴 26 径 22~62cm	
2		川原町	方墳	
3		"	前方後円墳	
4		"	方墳 2	
5	金 比 羅 古 墳 群	上本庄町鎌ヤガ尾根	前方後方墳 1、方墳 2、石室 1	
6	小 馬 枝 古 墳 群	" 小馬枝	前方後方墳 1、石室 1	
7	中 西 古 墳 群	" 中西	方墳 2、石室 5	
8	荒 神 古 墳 群	" "	墳形不明 2 基	
9	平 田 古 墳 群	" 平田	円墳 2、方墳 6	
10	荒 船 古 墳 群	" 荒船	円墳 2、方墳 5	
11	荒 船 遺 跡	" "	遺物散布地	縄文式土器 須恵器片
12		新庄町坂山	"	
13	玉 野 寺 跡	上本庄町	寺跡	
14		川原町	遺物散布地	須恵器
15		"	"	須恵器・土師器
16		"	"	"
17		"	"	"
18		"	"	"
19	荒 神 古 墳	"	円墳、石棺式石室	径 20 cm
20		"	方墳 2	
21	後 谷 古 墳 群	"	方墳 9	
22		"	塗跡	
23	内田功之助宅上古墳	福原町	円墳、横穴式石室	
24	上の堂横穴群	"	4穴	
25	長 水 寺 跡	"	礎石	
26	小 林 古 墳 群	坂本町小林	方墳 3 1号 12×12×2.5 2号 11×11.5×2 3号 7.5×7.5×2	
27	薄 井 原 古 墳 群	" 薄井原	前方後方墳 1、方墳 2	方墳 1 迂 8 m
28	坂 本 館 跡	" 唐人原	土壘	
29	坂 本 中 遺 跡	"	遺物散布地	須恵器・土師器片
30		"	方墳	
31	香々廻 古 墳 群	"	方墳 3 1号 8×8×1 2号 12×10×0.5 3号 11×9.5×2	
32	中 久 跡 古 墳	"	前方後方墳	7.5×5.5×2 m
33		"	遺物散布地	須恵器

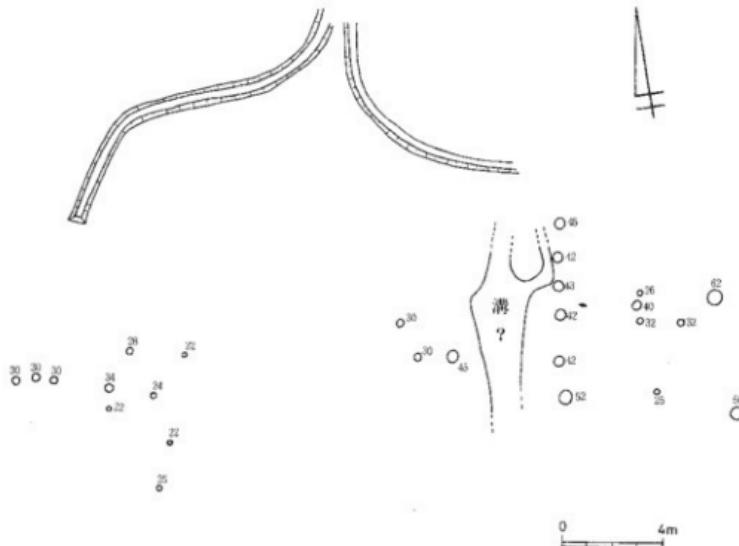
III 調査の概要

(1) 芝原遺跡

福原地区の東側、国道431号線より北へ200mほどの地点にある。重機による表土の除去作業中に発見されたもので、耕作土除去後の地山面上に、26穴の柱穴状のビットと溝状遺構が認められたので、この地域の小字名をとり、芝原(しばはら)遺跡と名付けた。ビットは略円形で直径22cmから62cmを計る。

溝状遺構は、幅最大2m、長さ6m以上を測るが、北・南側とも除去された耕作土が堆積しており、これ以上の規模は確認出来なかった。この溝の東側に、径40~45cmのビットが7穴ほど直線をなして検出された。溝状遺構に付随した柵列の一部とも考えられる。他のビット群の検出状況は不規則で建物規模の推定は出来なかった。

遺物は、除去された耕作土中から須恵器の壺片が一片採集された他は、遺構面からは何ら発見出来なかつたので、皆無と言ってよい。



第2図 芝原遺跡柱穴平面図 (数字は直径 cm)

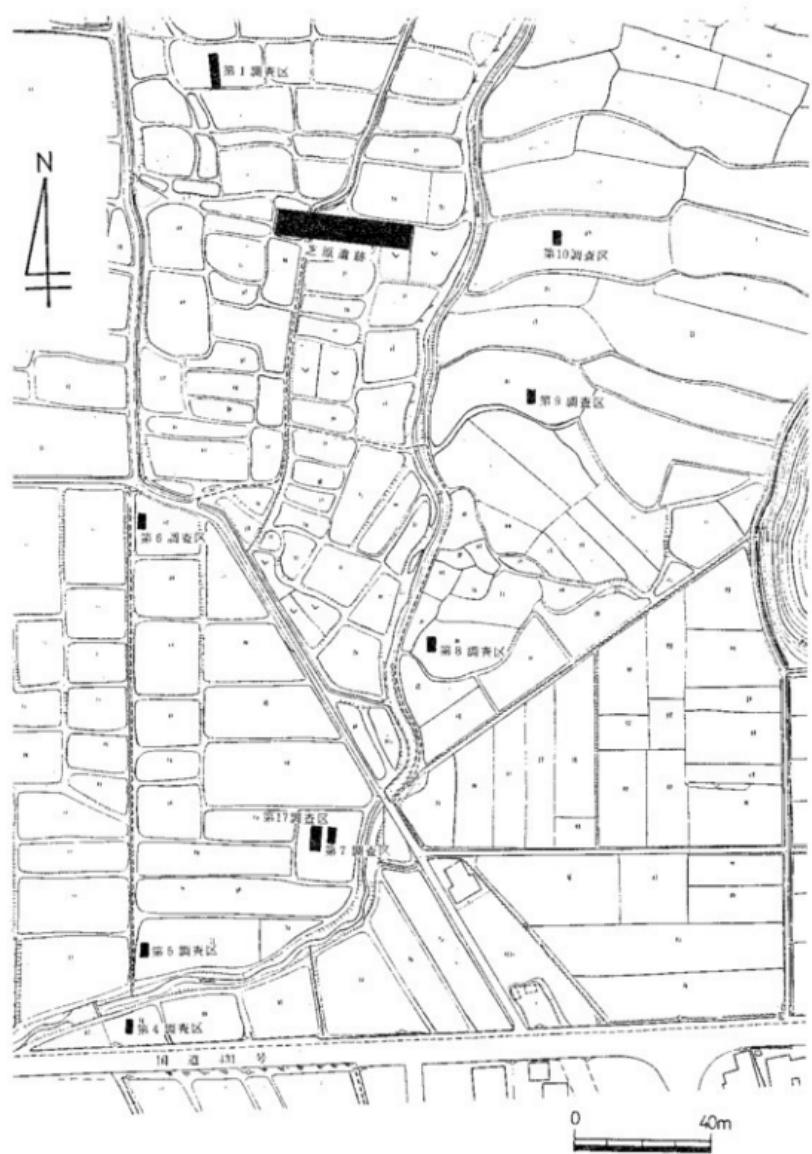


第3図 調査区位置図

第2表 試掘調査箇所一覧表

単位 m

トレンチ番号	調査面積	遺構	遺物	備考
1	2×10×0.50	柱穴2 Φ 0.6, 0.74	なし	
2	2×10×0.65	柱穴1 Φ 0.43	陶器碗1	17世紀初期の唐津焼
3	2×10×0.65	なし	なし	
4	2×10×0.65	"	"	
5	2×4×0.60	"	"	
6	2×4×0.55	"	"	
7	2×4×0.95	"	須恵器高台付环、甕 高台付环1、甕口縁1、他9片	
8	2×4×0.80	"	なし	
9	2×2×0.95	"	"	
10	2×4×0.95	"	"	
11	2×4×0.35	"	須恵器甕片2	
12	2×4×0.55	"	なし	
13	2×4×0.45	"	須恵器甕片4 小師器片3	
14	2×4×0.90	"	なし	
15	2×4×0.55	"	須恵器环身1、甕片1	
16	2×4×0.55	"	なし	
17	3×7×0.65	"	"	
18	2×4×0.90	"	"	
19	2×4×0.70	"	"	
20	2×4×0.90	"	"	
21	2×4×0.85	"	"	
22	2×4×0.95	"	"	
23	2×4×0.85	"	"	
24	2×4×1.05	"	土師質土器1	耕作土直下第2層上部
25	2×4×0.95	"	須恵質土器1	衛前系統(室町期以降) 甕か土釜
26	2×4×1.00	"	なし	
27	2×4×0.80	"	"	
28	2×4×0.90	"	"	
29	2×4×1.00	"	"	
30	2×4×0.65	"	"	
31	3×5×0.65	幅0.25、 深さ0.1~0.15の溝	"	
32	3×5×0.85	なし	"	
33	3×5×0.70	"	"	
34	3×5×0.15	"	"	
35	3×5×0.20	"	"	
36	2×4×0.20	"	"	



第4図 芝原遺跡及び1,4～10,12調査区位置図

(2) 各調査区の概要

第1調査区

芝原遺跡の北西50mの地点に、幅2m、長さ10mのトレンチを設定した。第1層は黒色の耕作土である。15cm程度掘り下げたところで、第2層である明褐色土層に達した。更に、15cm程掘り込んだが、土層の変化がみられなかつたので、調査を打ち切つた。

第2層から掘り込まれた径60cmと74cmのビットを検出したが、いずれも遺物は皆無であった。

第2調査区

芝原遺跡の北側110mの地点に、幅2m、長さ10mのトレンチを設定した。第1層は黒色の耕作土で厚み15cmを測る。第2層は暗灰褐色土で厚み7cmを測る。第3層は黒色ブロックを含む褐色の粘性土で厚さ最大9cm。表上下47cmで明褐色の地山面に達する。このトレンチ北端より南へ1m程のところで、地山を掘りこんで径43cmのビットを検出した。このビットの上面で、陶器碗1個が検出された。

第3調査区

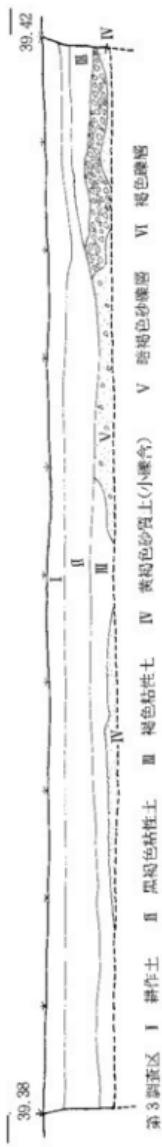
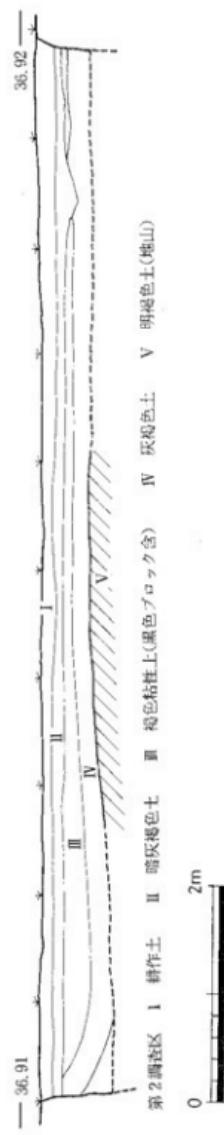
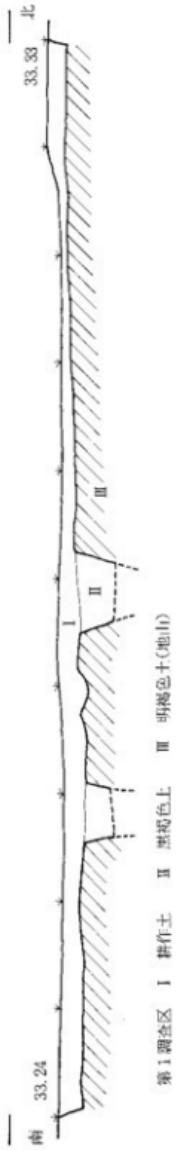
第2調査区の北西約60m程の地点に幅2m、長さ10mのトレンチを設定した。第1層は厚み15cmの耕作土。第2層は黒褐色の粘性の強い土で厚み20cmを測る。第3層は褐色の粘性土であるが、一部第4層黄褐色砂質土（小礫を含む）と第5層暗褐色砂礫層によって切られている。厚さは最大22cm以上を測る。第4層、第5層は共に径1cm～10cm程の礫を含む。何れの層にも遺物は無かつた。

第4調査区

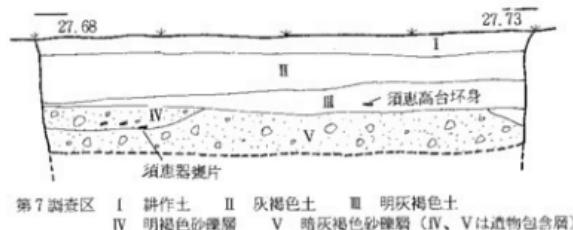
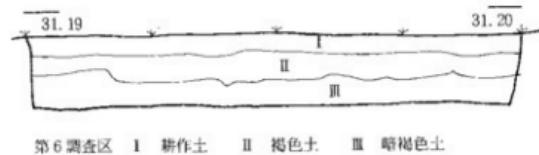
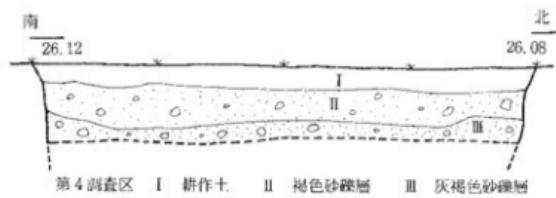
国道431号線の北側に隣接した水田に、幅2m、長さ4mのトレンチを設定。第1層は暗灰褐色を呈する耕作土である。第2層は厚さ最大34cmの褐色の砂礫層、第3層は灰褐色の砂礫層で、63cm程度掘り込んだが何れの層でも遺物は発見されなかつた。

第5調査区

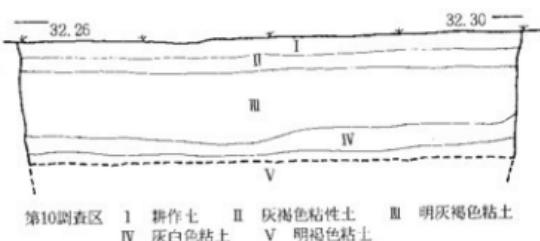
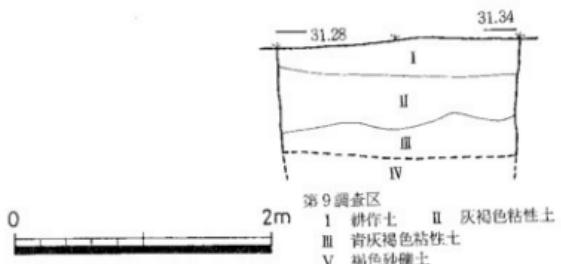
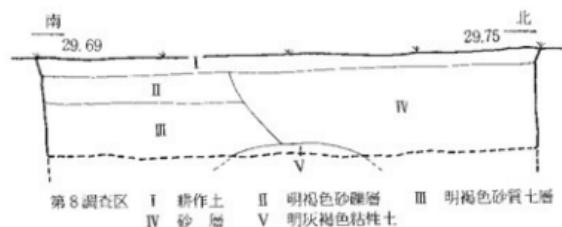
第4調査区の北15m程のところに長さ4mのトレンチを設定。第1層の暗褐色の耕作土の下に明褐色の地山ブロックを含む第2層暗褐色土があり、第3層は灰褐色の粘性の強い土である。いづれも遺物は皆無。



第5図 1～3調査区断面図



第6図 4～7調査区断面図



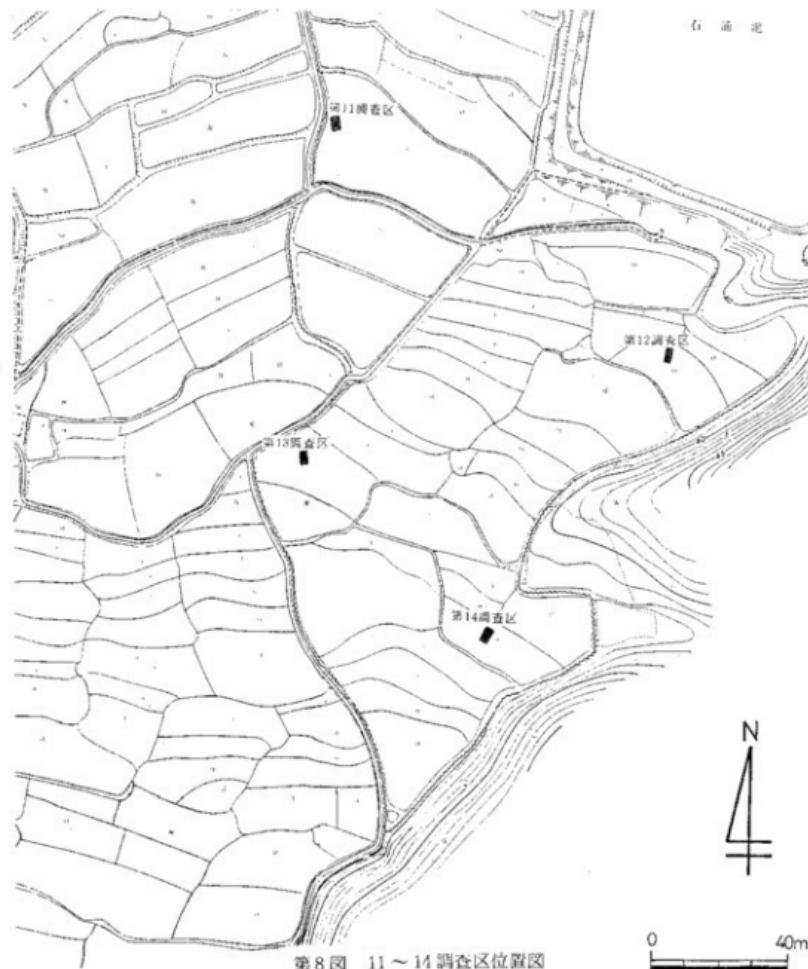
第7図 8～11調査区断面図

第6調査区

第5調査区の真北約120mの地点に長さ4mのトレンチを設定。耕作土下20cmで厚さ31cmの褐色土があり、最下層は暗褐色土である。遺物は無かった。

第7調査区

第5調査区の北東約60mの地点に長さ4mのトレンチを設定した。耕作土の下に第2層の灰褐色土が南端で48cm、北端で28cmあり、第3層は明灰褐色土で北端で厚さが28cm



第8図 11～14調査区位置図



である。この層の中程から須恵器の長頸壺の底部と思われる破片が1片出土した。（第17図①）

第4層は明褐色砂疊層であるが、トレンチ中央で第3層に切られている。この層からは甕片の口縁部1片と、同一個体と思われる甕片が9片発見された。トレンチ南側の第5層との界面で、須恵器の甕片が1片検出された。第5層は暗灰褐色の砂疊層で40cmまで掘り下げたが遺物は発見出来なかつたので、調査を打ち切つた。

第8調査区

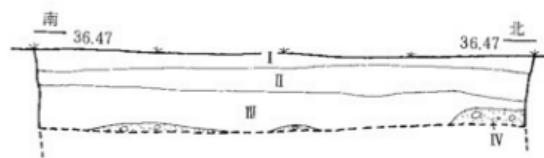
第7調査区の北東約60mの地点に長さ4mのトレンチを設定。第2層は明褐色砂疊層で厚さ22cm、第3層は明褐色砂質土で厚さ44cm、第4層は砂層で厚さ最大68cmを測る。第2層と第3層はトレンチ中央で第4層に立ち切られている。第5層は明灰褐色の粘性土で、トレンチ中央で一部確認した。遺物は無かつた。

第9調査区

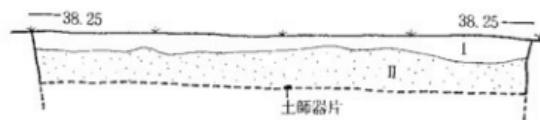
第8調査区の北北東80m程度の地点に長さ2mのトレンチを設定した。耕作土以下4層に区分され、最下層は表土下93cmで褐色の砂疊層となる。遺物・遺構とも発見出来なかつた。

第10調査区

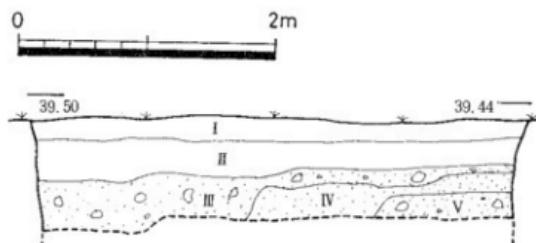
第9調査区の北北東約40mの地点に長さ4mのトレンチを設定した。耕作土以下5層に分けられる。確認した最下層は表土下82cmで、明褐色の粘土層となつてゐる。遺物はなかつた。



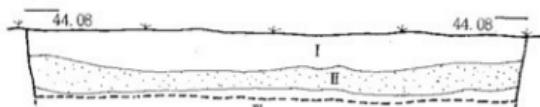
第12調査区 I 耕作土 II 灰褐色粘性土 III 明灰褐色粘性土
IV 暗灰褐色砂砾層



第13調査区 I 耕作土 II 褐色砂質土(遺物包含層)

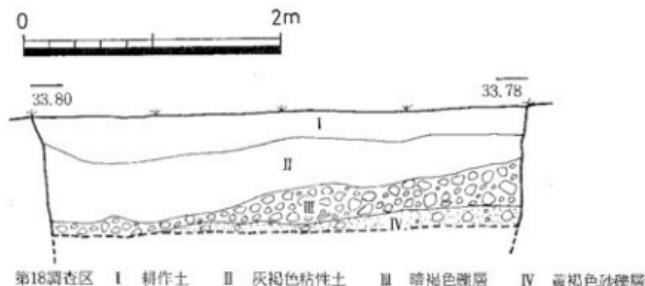
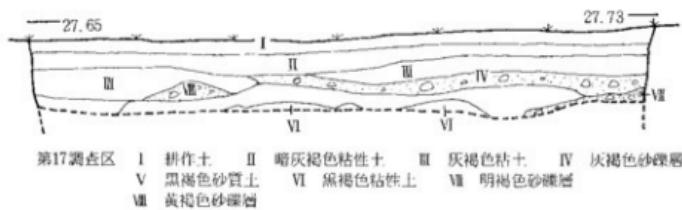
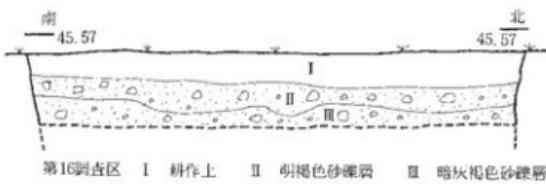


第14調査区 I 耕作土 II 明褐色粘性土 III 暗灰褐色砂砾層
IV 明灰褐色砂質土 V 灰褐色砂砾層

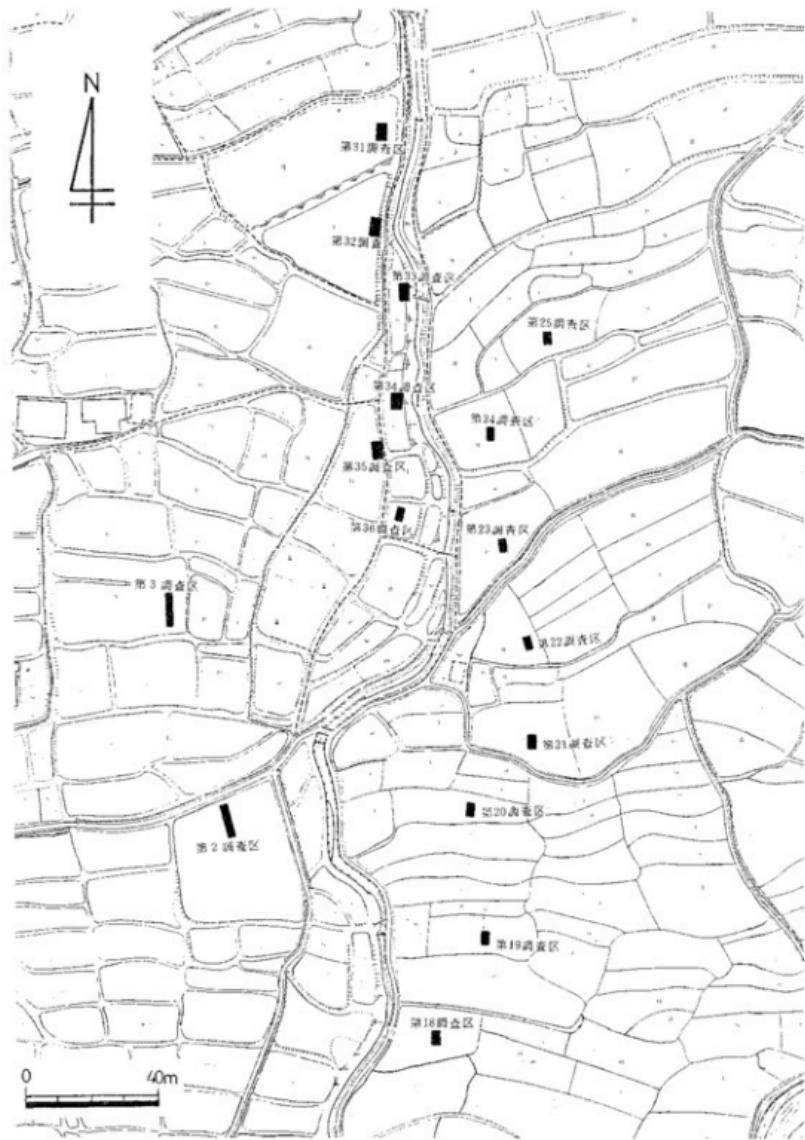


第15調査区 I 耕作土 II 明灰褐色砂質土(遺物包含層)
III 暗灰褐色粘性土

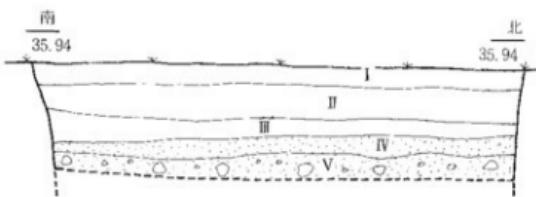
第10図 12～15調査区断面図



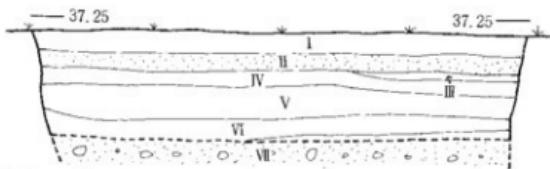
第11図 16～19調査区断面図



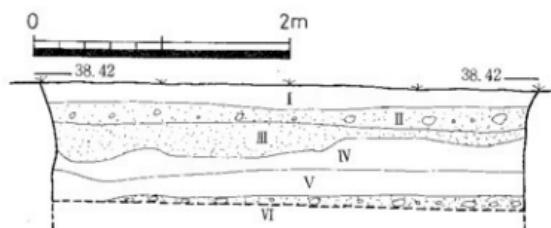
第12図 2, 3, 18 ~ 25, 31 ~ 36 調査区位置図



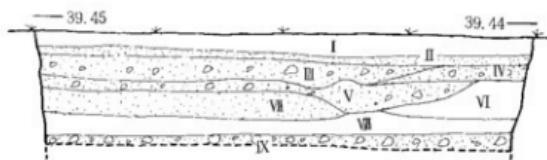
第20調査区 I 耕作土 II 灰褐色粘質土 III 灰褐色粘性土(鉄分の為変色)
IV 青灰色砂質土(礫10%程混入) V 黄褐色砂礫層



第21調査区 I 耕作土 II 灰褐色砂質土(小礫5%程度含む) III 棕褐色土層
IV 灰褐色砂質土 V 灰褐色粘質土 VI 灰褐色粘土 VII 黄褐色砂礫層



第22調査区 I 耕作土 II 黄褐色砂礫層 III 黄褐色砂層 IV 灰褐色粘性土
V 灰褐色粘土 VI 黑褐色砂礫層



第23調査区 I 耕作土 II 茶褐色砂質土 III 暗褐色砂礫層 IV 青灰褐色砂質土
V 黄褐色砂礫層 VI 青灰褐色粘性土 VII 灰褐色砂質土
VIII 灰褐色粘土 IX 黑褐色砂礫層

第13図 20 ~ 23 調査区断面図

第11調査区

第2調査区の東側約210mの地点に長さ4mのトレンチを設定。第1層耕作土の下16cmで、第2層明褐色砂礫層に至る。ここからは須恵器高台坏の底部1片と甕片1片が出土した。第3層は暗褐色を呈する砂礫層であった。

第12調査区

第11調査区の北西約70mの地点に設定。表土下40cm~55cmでこのトレンチの第4層である暗灰褐色の砂礫層に至るが、いづれの層にも遺物はない。

第13調査区

第11調査区の北北東約90mの地点に設定。耕作土下第2層の褐色砂質土中で須恵器の甕片4片と土師器片2片が出土した。

第14調査区

第12調査区の真北約90mの地点に設定。第1層は明褐色の耕作土である。第2層は明灰褐色の粘性土で厚さ32cmを測る。第3~第5層はいづれも径0.5~1cmの小礫を含む砂礫層である。どの層にも遺物は無かった。

第15調査区

第14調査区の北北東約150mの地点に設定した。第2層の明灰褐色の砂質土中で須恵器の坏身1片と甕片を採集した。第3層は暗灰褐色の粘性土であった。この層では遺物は皆無である。

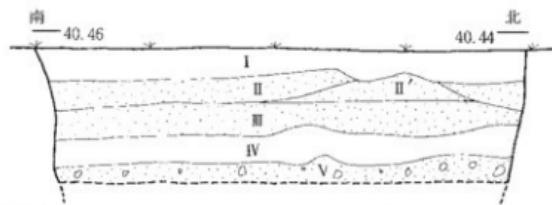
第16調査区

第15調査区の北西約50mの地点に長さ4mのトレンチを設定。表土以下59cmまで掘り下げたが、ここで確認した第3層暗褐色砂礫層に至るも遺物は検出されなかったので、調査を打ち切った。

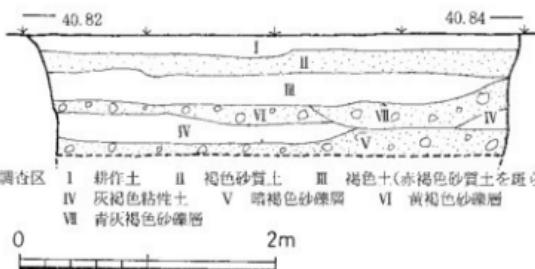
第17調査区

第7調査区の西に隣接して幅3m、長さ7mのトレンチを設定した。ここは、第7調査区で出土した少量の須恵器片の散布状況と遺構の有無を調べるために設定したものである。耕作土下第2層は暗灰褐色の粘性土で厚さ最大24cm、第3層は灰褐色粘土、第4層は3~5mmの角礫と円礫を70%程度混入した灰褐色砂礫層で、厚みはそれぞれ最大39cm、25cmを測る。

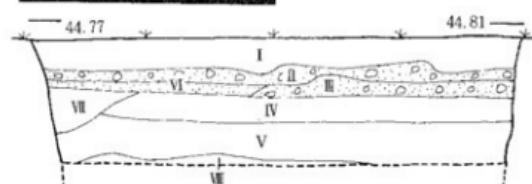
トレンチ北西角で、第3層と第4層及び第5層の黒褐色砂質土を切り込んで長径33cm、短径26cmの楕円形の溝が検出されたが、溝内には多量の雜木と砂が堆積しており、かつ流水も激しかったので、水田の地下排水施設と思われる。表土下最大95cmまで掘り込



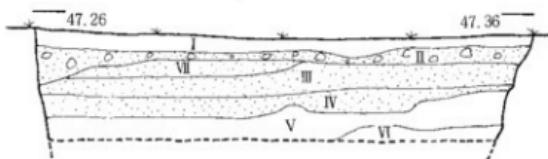
第24調査区 I 耕作土 II 明赤褐色砂質土 II' 青褐色砂質土
III 青灰褐色砂質シルト IV 灰褐色粘土 V 暗褐色砂疊層



第25調査区 I 耕作土 II 褐色砂質土 III 褐色土(赤褐色砂質土を斑に含む)
IV 灰褐色粘性土 V 暗褐色砂疊層 VI 黃褐色砂疊層
VII 青灰褐色砂疊層

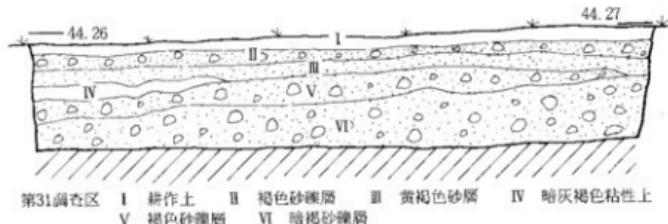
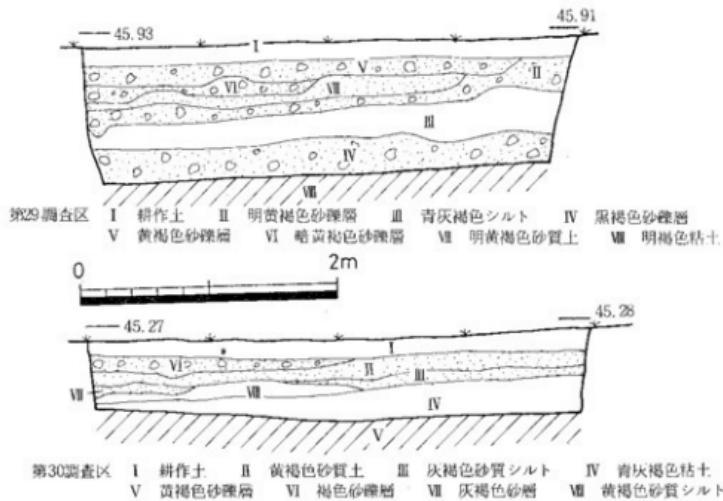
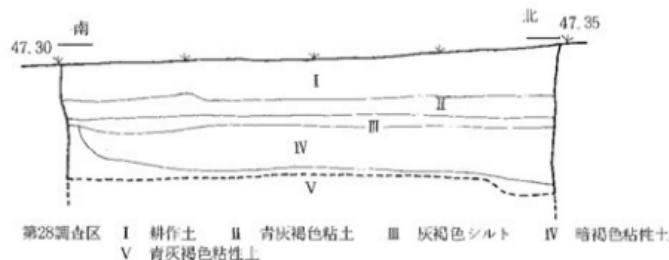


第26調査区 I 耕作土 II 黄褐色砂疊層 III 青灰褐色砂疊層 IV 灰褐色シルト
V 暗灰褐色粘土 VI 明黄褐色砂質土 VII 青灰褐色粘性土
VII 黑褐色粘性土



第27調査区 I 耕作土 II 黄褐色砂疊層 III 灰褐色砂質シルト IV 黄褐色砂質土
V 明褐色粘土 VI 明青褐色粘土 VII 茶褐色砂質土

第14図 24 ~ 27 調査区断面図



第15図 28～31調査区断面図

だが、遺構、遺物とも皆無であった。

第18調査区

芝原遺跡の北東約70m、第10調査区の北約60mの地点に、幅2m、長さ4mのトレンチを設定。第2層は灰褐色の粘性土で北から南に下るに従って厚みを増している。北端で18cm、南端で60cmを測る。第3層は暗褐色の砂礫層で、角礫を10%程度含有する。厚みは最大36cm。第4層は黄褐色の砂礫層で、円礫と砂を3:7の割合で混入する。いずれも遺物はなかった。

第19調査区

第18調査区の北東約30mの地点に長さ4mのトレンチを設定。第2層は第19調査区と同じく灰褐色粘性土であるが、鉄分が多く含んでおり錆色に変色している部分もある。第3層は黄褐色の粘性土、第4層は黄褐色砂礫層で砂と礫を4:6の割合で混入する。遺物は無かった。

第20調査区

第19調査区の北約30mの地点に設定。耕作土以下5層に区分される。第4層と第5層は他の多くの調査区と同様に砂質土（礫を10%程度含む）と砂礫層（0.5cm～3cm）の疊を40%程度含む）である。遺物はなかった。

第21調査区

第20調査区の北東約20mの地点に設定した。表土下80cmで第7層黄褐色砂礫層に達する。この層には径0.5cm～1cmの円礫と人頭大の砾石を30%程度含んでいる。遺物はない。

第22調査区

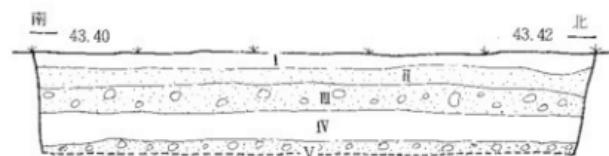
第21調査区の約20m北側に設定。ここでも表土下85cmで第6層の黒褐色の砂礫層に達したが遺物はなかった。

第23調査区

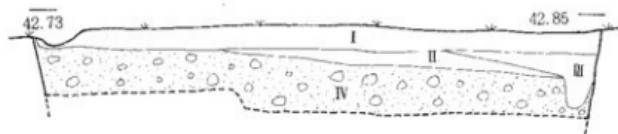
第21調査区の北30m地点に設定。検出した最下層は黒褐色砂礫層で、径0.5cm～1cmの角礫を約50%含んでいる。遺物は皆無であった。

第24調査区

第23調査区の北30m地点に設定。耕作土以下5層に分けられる。最下層は円礫を少量含む暗褐色の砂礫層である。耕作土直下の第2層上面で土師質の土縁が1個出土した他は遺物はなかった。



第32調査区 I 耕作土 II 灰褐色砂質シルト III 暗褐色砂疊層 IV 青灰褐色粘土
V 暗黄褐色砂疊層



第33調査区 I 耕作土 II 灰褐色砂質シルト III 黄褐色砂疊層 IV 黑褐色粘性土



第34調査区 I 耕作土 II 黄褐色砂質土(地山)



第35調査区 I 耕作土 II 黄褐色砂質土(地山)



第36調査区 I 耕作土 II 黄褐色砂質土(地山)

第16図 32～36調査区断面図

第25調査区

第24調査区の北東約30m地点に設定。7層に区分される。第3層までは砂礫を含まない層であるが、第5層～第7層は円礫を含んだ砂礫層である。第4層は上下を砂礫層にはさまれた灰褐色の粘性土である。第5層との界面で中世の備前焼の系統と思われる焼片が1片出土した。

第26調査区

第25調査区の北約80mに設定した。耕作土下第2層で黄褐色の砂礫層（角礫50%）となる。第3層も同様の青灰褐色の砂礫層（円礫50%）であるが、トレンチ南側では第4層の灰褐色シルトに変わっている。表上より93cm掘り込んだところで第8層の黒褐色粘性土層（礫少量含）に達したが、何れの層でも遺物は発見出来なかった。

第27調査区

第26調査区の北西約40mに設定。第1層耕作土下第2層で、前区と同様黄褐色の砂礫層に達した。第3層は灰褐色砂質シルトで厚み18cm。第4層は黄褐色砂質土で厚み21cmを測る。第5層は明褐色の粘土層である。第6層はトレンチ北側で一部認められたが、第5層よりもやや青みがかった褐色の粘土層である。第7層は、南側で第2層と第3層にはさまれてレンズ状に堆積していた。茶褐色の砂質を呈し最大厚14cmである。本調査区を含む第26～第30調査区では下層の砂礫層とは別に耕作土の直下で砂礫層が認められる。

第28調査区

第27調査区の北東30mに設定。耕作土以下5層に区分された。表上下30cmの第2層から砂礫を含んだ粘性土が堆積している。遺物はなかった。

第29調査区

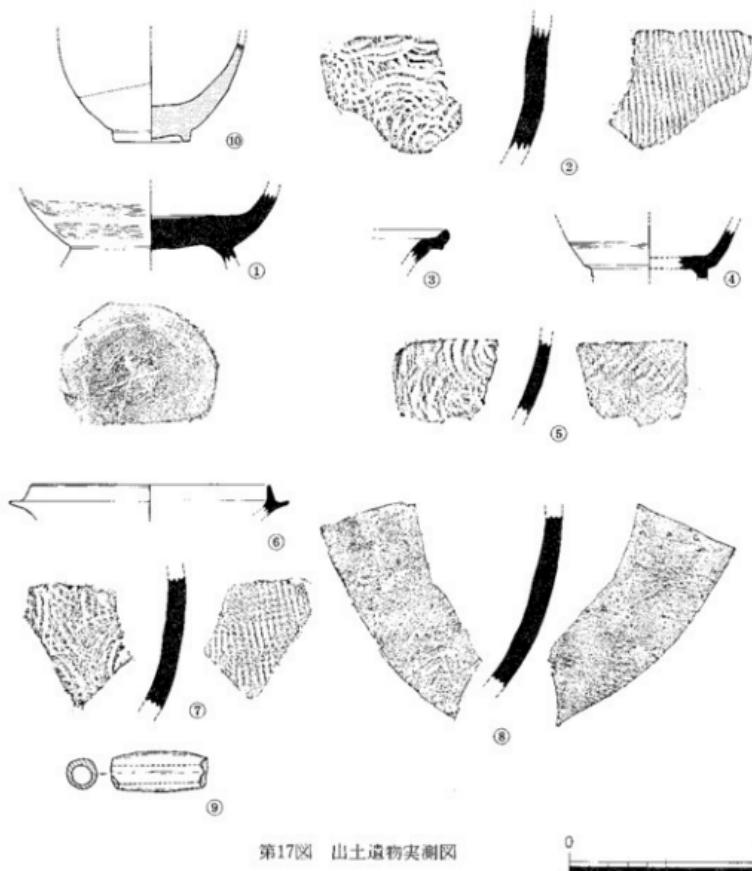
第26調査区の西約40mに長さ4mのトレンチを設定。第1層は褐色の耕作土で厚み14cm。第2層は明褐色の砂礫層で礫を10%程度混入する。この層は北から南に向かって傾斜しており、この間に第5層～第7層までの黄色をおびた褐色の砂礫層と砂質土層が堆積していた。第3層は青灰褐色のシルト質で厚み35cm。第4層は黒褐色粘土の地山面である。遺物はなかった。

第30調査区

第29調査区の南約10mに設定した。このトレンチの北側では砂礫層は検出されなかつたが、中央部から褐色の砂礫層が2層にわたり堆積し、南に下るに従いその厚みを増している。遺物は無かった。

第31調査区

第30調査区の南方約15mに幅3m、長さ5mのトレンチを設定した。この調査区でも耕作土直下から褐色の砂礫層となっている。第4層は暗褐色砂礫層となっているが、トレンチ北壁の中央から、この層を上端とした、幅25cm、縦幅10~15cmの溝が、トレンチ南東に向かって検出された。溝内の堆積土は黒褐色を呈し、溝底には直径10cm~20cmの円錐と角錐が混在し、礫間には砂も入っていた。溝内の礫、砂の含有率はそれぞれ50%~20%で残り、30%は黒褐色粘性土である。この溝内からは遺物は全く発見されなかったので、何等かの排水施設であると思われるが、時代的な確定は出来ない。



第17図 山土遺物実測図

第32調査区

第30調査区の南側30m程のところに幅3m、長さ5mのトレンチを設定した。5層に区分されるが、単純な堆積層で、遺物もなかった。最下層は同じく暗褐色の砂疊層である。

第33調査区

第32調査区の南東約20mの地点に幅3m、長さ5mのトレンチを設定した。南側では、耕作上下に黄褐色の砂疊層(50%の円疊)が認められる。遺物はなかった。

第34調査区

第24調査区の西40m程の地点に幅3m、長さ5mのトレンチを設定。わずか15cm程で黄褐色の砂質土の地山面を検出した。単一の耕作土層である。

第35調査区

第34調査区の南西20mに幅3m、長さ5mのトレンチを設定。第34調査区と同じく单一の耕作土で20cmで地山面に達した。遺物なし。

第36調査区

第23調査区の西40m程に幅2m、長さ4mのトレンチを設定、同じく单一の耕作土層で、遺物もなかった。

IV 出土遺物の概要

1) 須恵器……第7、第11、第13、第15、第25、調査区で出土している。

①は第7調査区第3層から出土した長頸壺の底部破片である。内外面とも明灰色を呈し、径0.5~2mmの白色砂粒を含有する。内面底部に若干の自然釉がある。(第図)

②は同じく第7調査区第4層から出土した9片の壺片のうちの一片である。外面に平行叩き、内面に同心円状の叩き痕がある。いずれも断面はかなり磨滅しており流失してきた可能性が大きい。

③は同じく第4層から出土した壺片のL1縁の一部と思われるものである。暗灰色を呈し焼成も良好である。これも断面は磨滅している。②と同一個体と思われる。

④は第11調査区第2層中から出土した高台坏の底部片である。灰色を呈しており、外側は右回転のヘラ削り調整をほどこすが内面・断面とも磨滅している。他に同一層より一片出土しているが表裏とも磨滅が激しく調整痕は明確ではないが壺片の一部と思われる。

⑤は第13調査区第2層より出土した4片の須恵器のうちの1片である。表面に平行叩き、裏面に同心円状の叩きを有するがいざれも磨滅しており明確ではない。壺片の胴部の一部と思われる。

⑥は第15調査区第2層中より出土した坏身の口縁の一部である。表裏とも回転ヘラ削りのちナデ調整を施す。断面はやや磨滅している。

⑦は第24調査区第4層から出土した壺片の一部と思われる調整痕がある。磨滅は他の壺片に比して若干少ない。

2) 土 師 器

第15調査区第2層中で須恵器の破片とともに出土した2片の土師器がある。同一個体とみられるが、表裏とも磨滅がひどく、器形も不明である。

⑧は第23調査区第2層で出土した土鍤である。長径5.0cm、短径最大2.05cmを測る暗灰色を呈し、一見須恵質のようであるが胎土に0.5～1mmの大砂粒を混入し焼成もろいので、周囲の土の影響をうけて土師質が変質した可能性が大きい。

近年まで使用されていた投網の土鍤とも類似しており年代は確定出来ない。

3) 陶 器

⑨は第2調査区の第5層上面で出土した唐津焼の碗である。17世紀初めの焼成で、その当時、一般的に使用されていたものと考えられる。

⑩は第25調査区第5層上面で出土した。焼成は須恵質であるが、内外面ともなで調整の痕がみられる他は、明確な調整痕はない。外面には、ススが付着し、内面には駆けのこげついたと見られる炭火物がある。室町期以後の備前焼の系列に属するもので、壺か土釜の一部と思われる。

V 小 結

1. 調査箇所について

前述のとおり福原町地内の広大な水田地帯において計36箇所もの多数の試掘箇所を設定して調査したが、個々の調査面積は2×4mを基準としたため、遺構、遺物の確認をする上では、やや困難が伴なったが、それでも土層の堆積状況や埋蔵文化財包蔵の有無については、既略把握出来たと考える。それによると4.5.7～28調査区の耕作土の下層は概して砂や礫混りの土層が多く遺構は全くなく少量の土器などの遺物もやや磨滅し、上流から流されてきたものであると考えられる。したがって、福原川東部の低地水田一帯では生活面

を想定することは困難である。

一方1～3、6、29～36調査区では耕作土直下もしくは最下層で硬くひきしまった黄褐色砂質土があらわれ、とりわけ1.2調査区では直徑60cmというかなり大きい円形の柱穴と思われるビットが検出され付近で芝原遺跡も発見されているので福原川以西の高台水田一帯については良好な地盤の上に何らかの建物跡などの遺構があるものと考えられる。

この高台一帯については芝原遺跡を中心として、来年度以降も広範囲に調査を進めていく必要があろう。

2. 島根郡家との関連について

奈良時代に編さんされた「出雲國風土記」には出雲國九郡の内、現在の島根半島の佐陀川以東から鹿島町の佐太、恵譽の河北部を除き、大根島、江島を加えた地域が「島根郡」（しまねのこおり）として区画されている。もう少し具体的にいうならば現在の松江市の北部と半島部の八束郡美保閑町、八束町、島根町と鹿島町の一部を含めた広大な地域である。この島根郡の行政を司っていたのが「島根郡家」であるが、その所在地については風土記研究の歴史の流れの中で古くから諸説があり未だ結着をみていない。

「風土記鈔」「風土記解」「風土記考」「訂正風土記」「風土記密勘」などでは本庄または、新庄の辺もしくは邑生、上宇部尾の辺にあったと考えられていた。

「考證」では「今の持田村の福原の長慶寺の辺であろう」としている。

これを受けて大正8年刊「島根県史」では從来の説は「毛志山郡家北一里」「女岳山郡家正南二百卅歩」とあるに適合せずとし、毛志山を「澄水山」、女岳山を「川原山」に比定してそれらの距離と方位から逆算して現在の持田村大字福原部落の殆んど中央部を東西に通ずる通称横道に添いたる屋敷「シャシキ」を郡家の跡とした。この「シャシキ」は「グンシャシキ」の転化であるとする。又この「シャシキ」の西隣地には、小門（こかど）、大門（おおかど）なる屋号もあり、何らかの建物のあったことを想定している。

昭和28年刊の「山雲國風土記の研究」では朝山晴氏が「出雲國風土記に於ける地理上の諸問題」の中でこれを再検討し郡家—朝駅間の距離—十一里一百四十歩は郡家を福原地区に設定すれば困難であるとし朝駅渡から逆に引いてくると、八束郡持田村と松江市東川津町との境の辺なる納佐（なさ）付近になる。千駄駅から馬見谷を通れば納佐まで達し得る。さらに女岳山を和久羅山に、毛志山を「澄水山」とし、その外法吉郷、佐太横など各地への里程方位などから「……納佐を郡家の迹とする説には殆んど矛盾するものは存しない…」

と思われ「コショベ」という門名も大領社部臣と縁故があるとされた。

風土記研究の第1人者であった加藤義成先生はその著書「山雲国風土記参究」で「郡家は各地への路程から推定すると今の松江市東川津と持田との境、納佐の東辺にあったと考えられる」とし前述の朝山暗説と同じ考え方をもっておられた。

内田律夫氏は手塚郷の郷庁を今の長海平野の中海寄りに所在する長見神社付近に推定し、そこから郡家までの里程を測った結果、坂本下あたりと仮定された。

ただ福原町の丘陵も同じような条件を備えており福原地内の可能性もあることを付け加えられている。

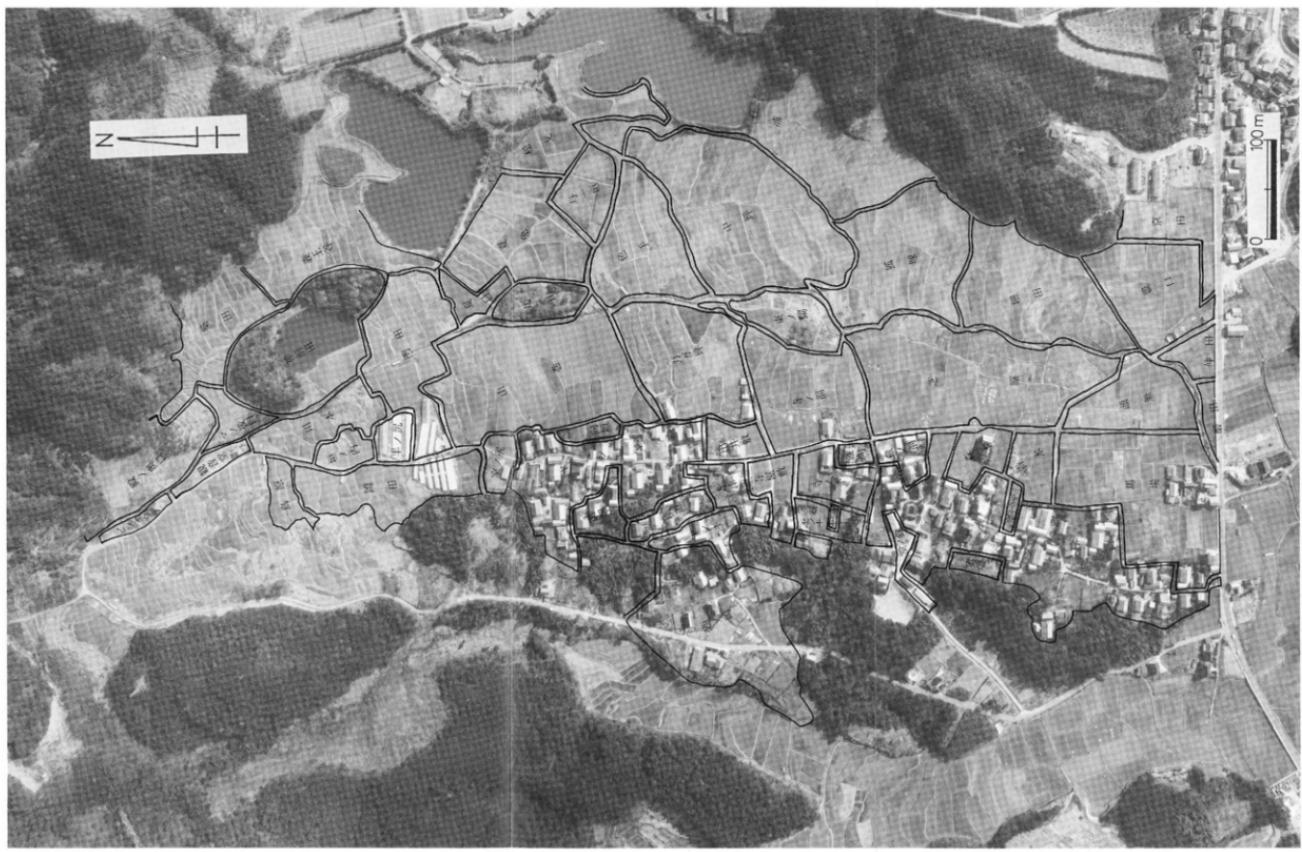
ところで大妻女子大学の文学部国文学科服部旦助教授は昭和59年度1年間島根大学へ内地留学され、その研修テーマとして隱岐國への渡しの湊である千鈞の駅家から島根郡家へ通する古道の復元をめざし精力的に現地踏査を実施された結果やはり、この福原町の「シャシキ」「大門」「小門」のある集落の一帯かあるいは、芝原遺跡の西側一帯に求められた。

納佐説では、付近に石棺式石室を有する「友田古墳群」や奈良期の須恵器が出土した「納佐遺跡」坂本下説では薄井原古墳（全長50mの前方後方墳で横穴式石室を2箇所所有する6世紀後半頃の半島部第1級の古墳）があり、それぞれ有力豪族の根拠地であったとしている。

福原地区の場合東西の丘陵には、小規模の古墳群しか存在せず、豪族の根拠地とは考え難いが、仮に郡家があったとした場合郡家を設ける際に一定の広い面積を必要とした結果か、何らかの政治的配慮のなされた結果なのかよく分からぬ。

そういうものの今回発見された「芝原遺跡」の柱穴群だけでは個々の建物の規模や建物の配置状況が不明確であり、出土遺物も殆んど周辺では採集出来ないことから、時期も限定することも出来ないので、今のところ島根郡家と直接結びつけることは時機尚早であろう。







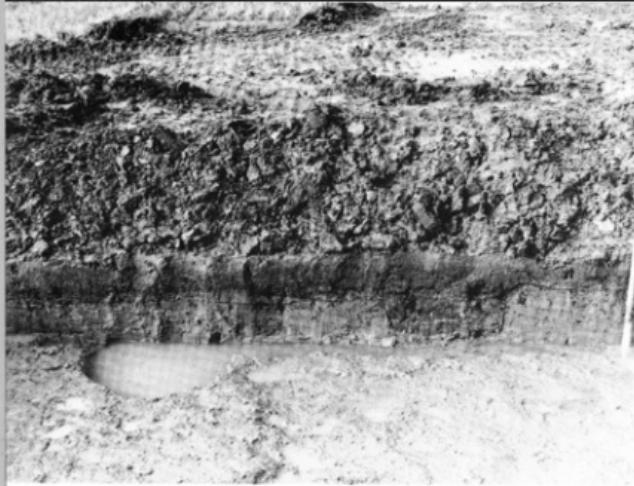
調査地から
北方澄水山をのぞむ



調査作業風景



調査作業風景



第1調査区西壁

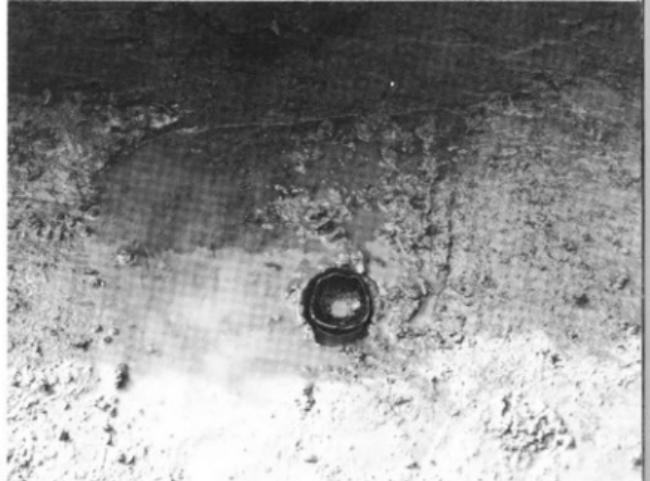


第1調査区検出のピット



第2調査区

第 2 調査区出土の陶器と柱穴



第 3 調査区



第 7 調査区





第7調査区須恵器片出土状況



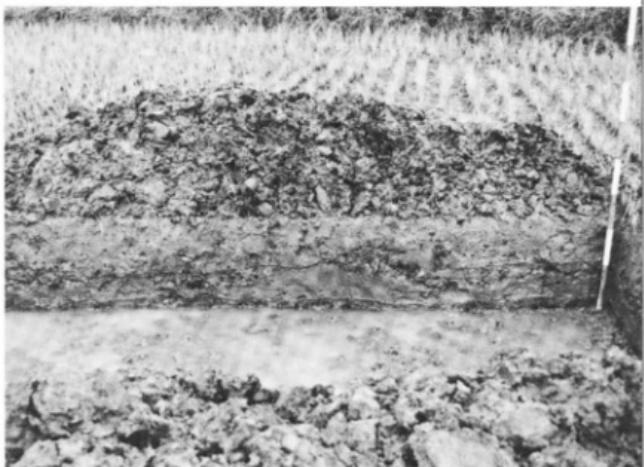
第7調査区



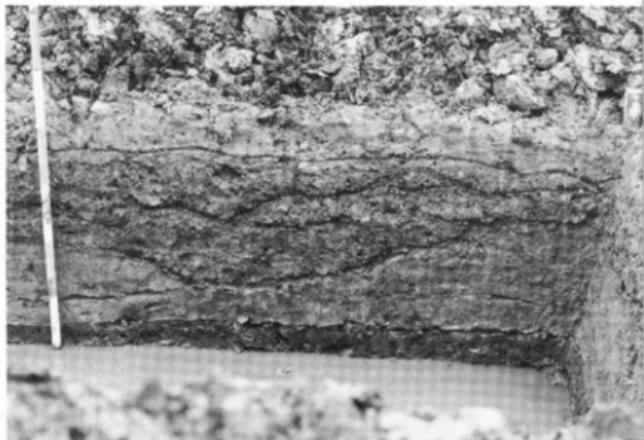
第13調査区



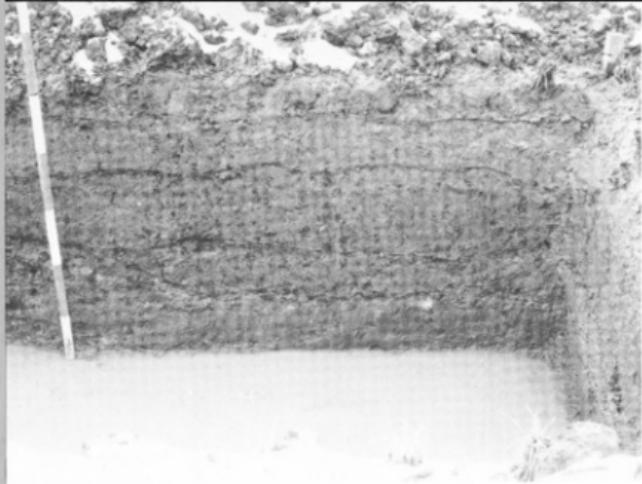
第13調査区須恵器片出土状況



第15調査区



第23調査区



第25調査区



第25調査区の出土遺物



第30調査区

第31調査区排水溝



第35調査区



第36調査区





現地指導会風景



現地指導会風景



埋め戻し完了



第2調査区出土 陶器碗



第23調査区 土錘出土状況



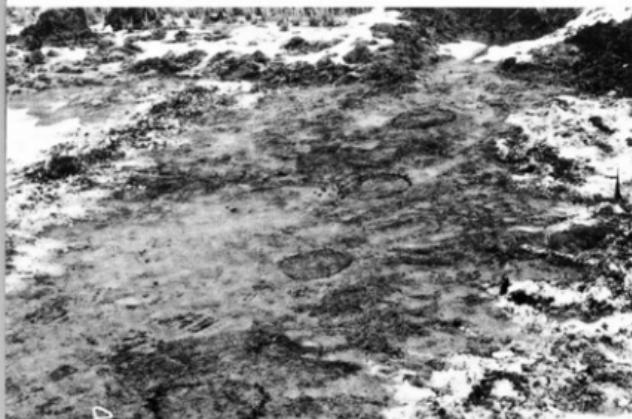
第23調査区
出土の土錘



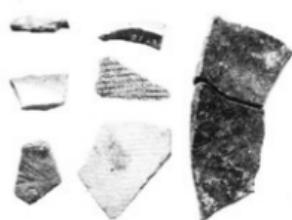
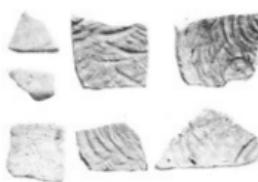
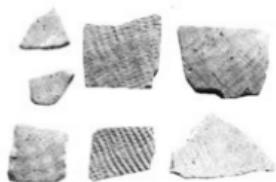
調査地から南方嵩山をのぞむ



芝原遺跡検出の柱穴



芝原遺跡検出の
柱穴群



松江北東遺跡
分布調査報告書(2)

昭和60年3月発行

発 行 松江市教育委員会

印 刷 有限会社谷口印刷

松江市母衣町89